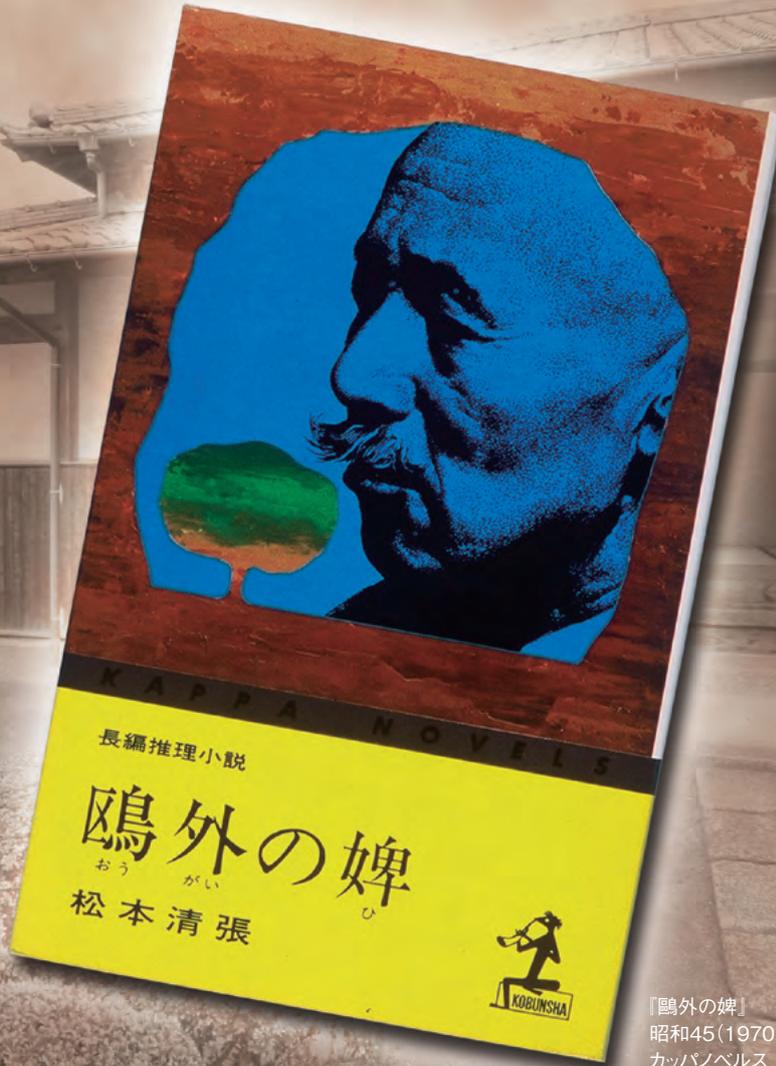


松本清張記念館

◆館報◆

2014.3
第45号

「それにしても、先生、鷗外の婢の調査が、
えらいところに発展しましたね？」



「鷗外の婢」は、
昭和四十四（一九六九）年九月十二日から
同年十二月十二日まで「週刊朝日」に連載された。

現在入手できる本
『松本清張全集』第10巻
文藝春秋

『鷗外の婢』
昭和45(1970)年
カッパノベルス

目次

- 松本清張研究会 第29回研究発表会…………… 2
- 特別企画展「北九州市と松本清張」…………… 5
- 展示品紹介…………… 6
- 点描 作品の舞台を訪ねて…………… 6
- 研究誌『松本清張研究』第十五号発刊…………… 7
- 友の会活動報告…………… 7
- トピックス…………… 8

作品紹介

執筆家・浜村幸平は、明治・大正期の文豪についての「考証」を主な仕事としている。ある総合雑誌からの依頼で、鷗外が九州・小倉に赴任した時代に雇った女中について書くことを思いつき、鷗外の「小倉日記」を読み直す。

鷗外がいちばん信頼していた女中（木村モト）に、強い関心を持った浜村は、北九州の小倉、門司、そして京都郡へと、モトの縁者を訪ね歩く。

調査の途中、浜村は、偶然入った小倉の古書店で、『神代帝都考』という鷗外の「小倉日記」にも登場する本を見つけ、購入する。この本に端を発し、『北九州古代国家論』を書いた地元歴史学者・藤田良祐と会い、古代、豊前地域にあった勢力が東遷したとの説を聞かされる。藤田は、福岡県史跡調査委員会をつくり、県の文化財指定とは別に、独自の史跡指定を行っていた。

（木村モト）の調査で歩いた土地には、こことく神代の遺跡があった。モトの末裔と郷土史とが、思わぬ形で交わった時、虚とも実ともつかぬ「鷗外の婢」の謎が、再び立ち現れる。

（専門学芸員 柳原 暁子）

松本清張研究会 第29回 研究発表会

平成25年12月7日(土)午後2時 法政大学

松本清張との浅からぬ縁

ぼくは古代文学研究者だけど、推理小説はめっちゃめっちゃ読んでいます。小学校時代に『怪盗ルパン』を全部、貸本屋で借りて読みました。それから、シャーロック・ホームズに入って、これは文庫本になります。話は違いますが、中学生のころ同級生に松本清張の息子がいたんです。松本家が新築したとき、友だちと見に行きました。玄関のチャームを押したら「どなたですか？」というから、「松本なんとかくくん、いますか？」と訊くと、「お坊っちゃま、今、お出かけです」と言われたんです。「あいつ、お坊っちゃんだったんだ」とそのときのシヨックが忘れられない(笑)。それから松本清張を読むようになるんですよ。

〈時代の関心〉

〈時代の関心〉について考えるとき、松本清張の場合は分かりやすい。『Dの複合』は戦中に起きた犯罪の真犯人に、戦後その犠牲者の息子が復讐をする話だけど、特に『ゼロの焦点』などは戦中・戦後の体験を隠して生きている、そのために殺人が起きるという話で、ぼくらは皆、何となく分かるわけです。ぼくは昭和十八年生まれです。上野なんかに行きますと、浮浪児だらけで傷痍軍人がいたりする。食べ物がなく、母が和服を売ってお米を手に入れていた。必ず親戚に誰か戦争で死んだ人がいた。玉碎した人もいる。そういう戦中から戦後を時代的に皆、共有しているわけです。だから、清張作品が共感を得る。

そうした〈時代の関心〉をもう少し歴史化しようというのが今日の狙いです。

資料の年表の、一九四五年が終戦の年で、四六年のところに〈日本文学協会結成〉とあり、「日本文学」という雑誌が出る。いわゆるマルクス主義系です。マルクス主義的な歴史観が解禁になり、戦前の皇国史観に対抗するものとして、この時代から五十年代ずっと大きな力を持ちました。そして、『民衆』という概念が出てきて、『地方』も注目されてくる。一九四九年には〈日本民俗学会〉が発足します。会長は柳田国男などは、『常民』たちの生活の中から文化を見てい

く。復興という問題に対して、この二つの流れがあるんですよ。

一九五一年には、マルクス主義的な流れとして歴史学研究会が〈歴史における民族の問題〉を出しだす。同年の西郷信綱『日本文学史』は、マルクス主義的方法の文学評価です。西郷信綱の一九五五年の『日本文学の方法』や、六〇年まで行くと、風巻景次郎さんなどが歴史社会学派ですね。一方、五三年に『折口信夫全集』、六二年に『柳田国男集』の刊行が始まります。『民俗』に対する関心も深くあつた。

ところが、歴史社会学派を中心的にやってきた西郷信綱さんが一九六七年に、『古事記の世界』を出す。ここでは、構造主義を前面に出してやる。六〇年代は研究にとつて重要な年です。一九六四年、東京オリンピックの年ですがこの年に、秋山虔さんの『源氏物語の世界』が出ます。古典文学で初めての作品論です。それから、三好行雄さんは一九六六年に『鳥崎藤村論』、六七年に『作品論の試み』を出します。日本文学研究の中で

作品論的な方法が出始めたのです。六五年に出た吉本隆明の『言語にとつて美とはなにか』、六八年の『共同幻想論』、これも構造主義的な要素が入ってきつつある本です。

『Dの複合』は一九六五年から六八年に連載された作品ですが、このころまでに『民俗』とか『歴史』、あとは『地方史』とかが、〈時代の関心〉を集め出していたのが分かります。

『Dの複合』にみる〈時代の関心〉 《補陀落渡り》

ここからは具体的な例を出します。(時代の関心)の初めは『歴史』と『民俗』です。一九五六年、終戦後十一年という時期に、『歴史読本』という雑誌が創刊されています。歴史を大衆化する、市民化する、民衆化する、そういう役割を担った雑誌です。同時に、売れるだけの読者層がいた。それから、地方史研究会ができて『地方史研究』という機関誌を出します。特に「信濃」など、こういう雑誌類が一九五〇年代の初めくらいから出だす。『地方』に暮らす人たちの意識を、民俗学と重ね、歴史とかを加えながら記述することが、方々で行なわれました。そういう『地方史』とか『民俗』に対する関心に呼応するかのようには、横溝正史の『八つ墓村』(一九四九・五〇)とか『悪魔の手毬唄』(一九五七・五九)とかが書かれます。

次の〈時代の関心〉は『Dの複合』の中にも出てきますが、『補陀落渡り』です。最初の『我が国民間信仰史の研究(二)』はとても重要な本です。早くも、一九五三年、終戦後八年目に出ている。「山中他界観念の表出と山岳信仰」という章に、『補陀落渡り』が出てくる。仏教の理想的な聖地は補陀落

講演

松本清張と古代

Dの複合を中心として

講師 古橋 信孝

○武蔵大学 名誉教授



山という山ですから、山岳信仰なんです。でも、基本的に日本の場合、海岸から船で行く。だから『補陀落渡り』。「補陀落渡海記」は、井上靖が「群像」の一九六一年十月に発表した小説です。次は、益田勝実の「フダラク渡りの人々」。六四年に、尾畑喜一郎さんの「補陀落渡海」。七八年の松田修の『日本逃亡幻譚』はなかなか面白い本です。

そういうのを読むと、補陀落渡海というのは、船に人が乗り込んで、三十日分くらいの水と食料を積むそうです。そして、蓋をして釘で留めちゃう。つまり、棺桶を造って、海に押し出すんです。干潮のときにね。すると、引かれて行き、海流にのって流れるわけです。で、ぼくは沖繩の歴史の本に、「沖繩本島の北部に変な船が流れていた、開けたら、人が生きている」という話が載っているのを見つけたんです。海流にうまく乗れば、どうも一部は沖繩に流れ着いちゃう。そのことを、ぼくは「補陀落渡りの果てー沖繩における仏教の伝来ー」（『毎日新聞』一九九〇年十二月十六日）に書いたのです。

こうやって、『補陀落渡り』が市民権を得る時期があったのです。で、『Dの複合』は一九六五年発表ですから、大体このころと一致する。だから、「時代の関心」として、補陀落渡りの話が作品に取り込まれていったのだと思います。

『Dの複合』にみる〈時代の関心〉 《旅》

最後の〈時代の関心〉は、『旅』の問題です。今度読み返した松本清張の本には、ほとんど『旅』が出てきます。「点と線」は時刻表がなければ、成り立たない。「ゼロの焦点」も

東京から金沢に行ったり帰ったり、『旅』は捨てられない。特に『Dの複合』がそうなんです。そこで〈時代の関心〉という発想からすると、絶対にこの時代、旅行が流行ったな、流行り出したはずだと考えました。

雑誌「旅」は、随分古くからあるけれど、一九五〇年代、「トラベルグラフィ」（鉄道弘報社 一九五二）、「旅と宿」（日本旅行会 一九五二）、「旅行の手帖」（自由国民社 一九五三）、「温泉と旅行」（温泉と旅行社 一九五三）、それから「オール旅行」（日本観光旅行社 一九五三）、というふうな五二年に、なんと四つの一般向けの雑誌が創刊されている。一九五〇年からの朝鮮戦争の特殊な需要があって、日本経済は急速に復興していきます。生活に『旅』をする余裕が生まれ、どうもこのころ『旅』が大衆化したようです。それ以降も、「ハイカー」（山と溪谷社 一九五五）とか、「旅行春秋」（日本交通公社 一九五七）、それから六〇年代に「観光フラッシュ」（三業社 一九六〇）、「月刊週末旅行」（朋文堂 一九六〇）とかが出てくるんです。ここまでくれば、『旅』が市民権を得たことがよく分かるんです。

『旅』と関連して、「時刻表」です。「時刻表」は復刊も早いです。「ポケット全国時間表」（交通案内社）は一九四八年で、相当に早い。ポケット版というのは携帯用ですから、旅行のときにとても便利です。それから、「携帯時間表」（弘済出版社大阪支社）は一九六〇年です。五〇年代から旅行が流行り出したことと呼応して、「時間表」を持って旅するわけです。「ハイカー」という雑誌は当時、登山が流行り出すのとも呼応しています。

『Dの複合』では、真犯人を追い詰める紀行文として「僻地に伝説をさぐる旅」が出てきます。観光名所だけでなく、伝説のある

地方を回るわけです。『羽衣伝説』『浦島伝説』とか。『Dの複合』ではその『伝説』も、元は古代にあってそれが『伝説』になってくるといって捉え方を、面白い。『伝説』の側から旅するとなると、全国が『旅』の対象になりうるわけです。

松本清張の『社会派』

今回読み直して思ったのは、松本清張の「社会派」はマルクス主義と別に関係付けなくてもいいということです。一九五〇年代、六〇年代は一種の社会変革を目指し

研究発表

松本清張と新聞小説

——『黒い風土』／『黄色い風土』を読む

発表者 山本 幸正

○早稲田大学
非常勤講師



一九五〇年代の新聞小説—— 新聞小説の『百花繚乱』の時代

一九五〇年代において新聞小説がどういうステイタスにあったか。ある回顧録では、敗戦後の「新聞の販売合戦の目玉商品」が新聞小説であった。各紙は競って力作を掲載し（中略）た。人気作品はすぐ映画化され、多くの観客をひきつけた。「まさに百花繚乱の様相を呈していた」という見方をしています。当時の感覚では、新聞小説は大きな舞台だったことが分かります。

また、文芸評論家の荒正人の『現代の英雄 小説家』という有名な本では、

た時代ですから、変革がどういふふうにか、社会批判として出てきたときに、推理小説は一つのスタイルになるわけです。清張は五〇年代、六〇年代の時代をとてよく書いているけど、推理小説というスタイルがその時代にとて合ったからだ、改めてぼくは感じました。清張の犯罪小説は、今の時代のそれとは違って、犯罪する側の痛みに焦点が当てられている。そういう問題は、清張が一九五〇年代、六〇年代に小説を書く中で、出してきた問題のような気がします。そういう意味で、「社会派」という言い方は成り立つのかなと考えました。

「小説家は、反逆者から英雄に変わってしまった。マス・コミュニケーションの王者でもある。」と、小説家を一番お金儲けができる職業として分析しています。そのあと「現在、流行作家としてあげられる人は、（中略）新聞小説の常連である。」と続いています。当時のメディア状況の中で、新聞小説は非常に重要なものだったので、やはり、戦後の文学を考えるとき無視できないと思います。

『砂の器』連載のとき、清張はこう語っています。「毎日読者に飽きさせずに読ませるのは相当の工夫を要します。ですから新聞の持つ機能をフルに利用出来るようにして下さい。作者、さし絵、編集者、編集者の三身一体となって協力すれば成功に漕ぎつける自信はあります。」これは重要な証言で、清張は自分だけの力ではなく、編集者、挿絵画家などと協力して新聞小説を作っているという意識があったのです。

『全国新聞小説一覽』に「新聞では到底全篇に流れるサスペンスを、毎日一回

一回小さきぎみに切って持たせることは不可能である。推理小説の分載が新聞に向かない事実は、新聞小説というものの性格をよく物語るものである。」と書かれています。清張自身も、「黒い風土」を連載する前に「推理小説は、いままで新聞連載には向かないようにいわれていたが、それは何かの欠陥があったからに違いない。／＼こんど、本紙に書くに当たって、推理小説のもつ特異性を活かした新しい小説にしたいと思うと同時に、書きながら新しい自分の作風を発見したいと念願している。」と言っています。清張は一つの挑戦として「黒い風土」を新聞に連載したのである。そして、それを大幅に改稿して『黄色い風土』と改題、単行本が刊行されました。

新聞小説に臨む清張—— 「黒い風土」の原稿に接して

僕の分析は新聞連載時の「黒い風土」に焦点を当てたものです。その原稿を全部一枚一枚読んでいく中で、特に興味深かったのは、挿絵画家・生沢朗との関係です。井上靖の『氷壁』の挿絵を担当して高い評価を得た生沢朗に対して、新聞小説の舞台ではまだ新進作家扱いの清張が何をしていたか。清張は『絵組み』で、しょっちゅう「こういう絵を」と画家にメッセージを発しています。例えば、一三一回の原稿を書いているときに、「原稿用紙の枠外に『一三四絵組み』と書いて、『一三四回の絵はこういうのを描いて下さい』と作家が願います。」

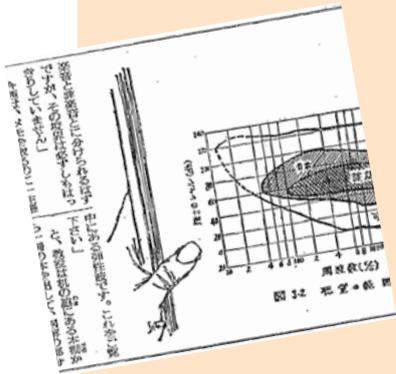
まで伝えていっているのです。「男二人が電車の中にいる場面」とだけだったら、生沢朗の方も自分で考えて描けるでしょうが、清張は「電車の外から電車の中を見て、男二人がゴルフケースを戸棚に上げている場面を描いてくれ」と書くんです。ちなみに、この場面を生沢は車中の視点から描きました。清張の指示どおりに描くと、ごちゃごちゃになると思ったのでしよう。このあたりも生沢はことごとく無視していきます。もう一つ、「富士山を描いてくれ」というのがありました。『氷壁』で読者の心をつかんだ生沢朗に富士山を描かせて、読者を取り込むという清張の戦略だったのか、しかし生沢は一回も富士山を描きませんでした。二人の間の葛藤が非常に面白いなあと思いました。

もう一つ、僕が目にした「絵組み」は、「クローズアップで描いてくれ」というものです。これを繰り返すんですね。文章での顔とか登場人物の描写を極力はぶいて、物語をスピードアップさせるためだろうと思いますが、生沢はそれを最初はずっと無視します。が、そのうち一応書くのです。若宮の顔ですが、線を描いていつてその中から一つの像を浮かび上がらせる生沢朗の描き方で、ぎりぎりクローズアップです。こういう葛藤があつて四三〇回の原稿用紙の余白に、清張は「次のエ」と自分が描いた絵を描くのです。全部線で生沢朗の描き方そのままでした。それをうけて、生沢は清張の絵をほとんどそのまま見やすいように描いています。ここで二人の間に和解が成立したのかなと思います。そのあとの生沢朗の絵は物語とうまく合っていて、面白いものになっているのです。

新聞を読む新聞小説—— 清張の読者戦略

「黒い風土」では、中心人物の若宮はとにかく新聞を読み続ける。「若宮四郎が、ロビーで、ふと、新聞綴りをとり上げたのは、小樽の渡辺巡査部長の溺死事件に、新しい進展はないか、と思つたから」。また、「若宮は、新聞を手にとつて、小さな活字をよんだ。記事は極めて短い。」のあと、「評論家島内輝秋氏は六月五日の日航機で来道、札幌のパレーヌ・ホテルに宿泊した。同氏は、(略)と、記事が引用されることもいっぱいある。若宮はその新聞を手にとつて読んでいるわけですね。若宮と同じように読者も新聞を手にとつて、小説を読み、それに載っている新聞記事を読んでいる。すると、新聞を読む若宮と、新聞上の小説を読んでいる読者が、意識するしないは別にして、身体感覚として溶け合つていく。そういう行為を媒介にして、意図的に読者を引きつけていく。清張の読者戦略かもしれません。

最後にも、新聞を読むこんなシーンがあります。若宮が悪い集団に拉致されて、富士山麓で監禁される。今から殺すぞというシーンで、首謀者はパンとかと一緒に、わざわざご丁寧に若宮に新聞を差し入れているのです。新聞に



「砂の器」連載
『読売新聞』夕刊、1961年3月30日

は、自衛隊が砲撃演習を行なうという記事があります。ちなみに、首謀者はこの砲撃演習の場に若宮を置きざりにして殺そうとするのです。つまり、今からこういう形で殺しますよと新聞を媒介にして、読者に伝えているのですね。さらに、「自由が欲しかった。——新聞を見ただけに、余計にそんな思いがした。新聞記事がちらりと自由な社会の隙間を見せてくれたようなものである。」と書いてあります。「黒い風土」はある意味、新聞を読むことをテーマにした小説でもあると強く感じました。

当時の『TBS調査情報』に非常に面白い清張論が載っていました。「清張の推理小説は」その論理を現実世界のなかに一度投げこみ、その現実と虚構とのからみあいの上に小説を成立させる、という特色を強くもっている。／＼読者とのコミュニケーションにおいても、読者を小説の世界に誘いこんでいくというよりは、小説を読者の生活のなかに投げこむ、といった性格が強い。」と言っています。要するに、清張の場合は、物語の世界にのめり込ませるのではなくて、その物語の世界を現実の側面ににじませてしまふ。読者が新聞を手にとつて新聞小説を読むときに、若宮もその動作を新聞の中でしてしまふ。すると、若宮が自分(読者)の側に来てしまふ。それが端的に分かるのが、『砂の器』の挿絵で、(実吉純一の『電気音響工学』より)という図があり、ここに本を持つ手が描きこまれていいる。この手と、読者が新聞を持つていいる手とが、ぶつち融解現象が起きる。このあたりをもっと研究すれば、清張作品の何が読者を惹きつけるのかがもう少し見えてくるのではないかと思つた次第です。

松本清張と北九州市

清張文学の原点

開催期間延長のお知らせ

平成26年
5月6日(火・休)
まで

場 所 松本清張記念館地階 企画展示室

入 場 料 一 般 500円 中学生 300円 小学生 200円

※常設展示観覧料に含む

CONTENTS

- I 思い出の中の小倉 — 少年期
- II 翼を広げて — 青年期
- III この地に根を張り — 壮年期
- IV 遙かな故郷 — 上京以後
- V 清張文学の原点として — 没後



五市合併以前の小倉市に、松本清張は育ちました。しかし、北九州市は以前から、清張にとってひとつの郷土です。

清張は、上京後もふるさと北九州市と関わりを持ち続けました。本展では、市制50周年を記念して、松本清張と北九州市との絆をご紹介します。

きよしとハルコの かつてに 企画展鑑賞

- きよし** 清張は北九州が嫌いだっただって聞くことがあるけど。
- ハルコ** そんなことないんじゃない？ 見て、この故郷についての寄稿の数々。
- きよし** ピアノの寄贈も、誰にでもできるものじゃないよ、この年、作家部門の長者番付1位になったんだって。
- ハルコ** この目録の筆跡ってひょっとして… あ、やっぱり清張の字だ！ 自分で目録まで書かなんて、すごい思い入れね。これで故郷が嫌いなんて、私には考えられない。もう「大好き」って言うといいレベルじゃない？
- きよし** 清張の心には、少年時代のピアノや図書館の思い出がしっかりと刻まれていたんだよ、きっと。昔の人の方が、手に入らないものが多かっただけに、今より「夢を見る力」を持っていたのかもしれないね。
- ハルコ** 「点と線」のトリックも、犯人の病弱な奥さんの机上旅行がカギになっているものね。そういう点では、インターネットなんかですぐに疑似体験できてしまう今の時代、清張のような創作は難しいかもね。



天神島小学校へピアノを寄贈する清張
1961(昭和36)年(小倉中央小学校所蔵)



TOKYO 1961



新聞のインタビューや広告で
小倉の思い出をいろいろ語っています



中央図書館開館にあたり、
自著を寄贈した清張自筆による
寄贈目録
1975(昭和50)年
(北九州市立中央図書館所蔵)

- きよし** 情報があふれすぎて、自分が体験した訳でもないのに、みんな分かったような気になっているだけかも。自分の体験と他人の体験さえ曖昧になっているというか。
- ハルコ** 清張も、同じようなことを言っていたわね。「情報があふれすぎるのは、ないのと同じ」って。
- きよし** この感想も、自分の考えだったかどうかだったか…。
- ハルコ** えっ？… そこはしっかりしてよね。

※上記は個人の感想であり、色々な考えを思いめぐらせて楽しめる企画展です。

火野葦平からの手紙



昭和二十八年二月二十二日、直木賞候補作だった「或る『小倉日記』伝」が、芥川賞に決定したと発表された。当の松本清張へは、勤務先の朝日新聞社の同僚が知らせてくれたが、信じてことができず、毎日新聞の支局に電話をかけて確認したという。郷土の先輩作家である火野葦平は、清張受賞の報に接し、すぐにお祝いの手紙を寄越している。

今度の芥川賞で、かえってあなたの中から妙な責任が生じることを恐れます。作家は、本来は、芥川賞も直木賞もない、作家それ自体のもの、それはわかりきっているのに、この賞が作家をしぼることは恐しいほどです。あなた自身の才能と方向とを、どうか、自由にのびさせて下さい。めでたいときに、ザックバランに、私が不安を打ちあけるのも文学というもののさせる業でしょう。要は芥川賞に殺されないようにして頂きたいということです。
(※1)

清張にとつて葦平は、仰ぎ見るような作家だった。葦平こそ、戦地での

芥川賞授賞が華々しく報道された大作家であった。殊に清張は、葦平が早稲田の学生の頃から注目していた。手紙を受け取った清張は恐縮し、丁

寧で長い手紙を返している。葦平の助言は、清張の心に響いたようだ。

これで気持ちちは救われました。芥川賞に縛られるな、殺されるな、思う通り書け、とのお言葉は、二三日来の小生の憂悶をといてくれました。

思う通り書く、——そう決ると、芥川賞という極端から解放された心の自由さを感じました。
(※2)

結果から見ると、清張は純文学という枠にとらわれることなく、創作の場を自ら開拓し、独自の地位を確立した。両者のやり取りは、清張の未来を見事に捉えていたと言わざるを得ない。

手紙からは、葦平の人物が偲ばれる。葦平自身が、芥川賞に翻弄された作家ではなかったか。また、「九州文学」門下でない清張の受賞は、地元文学者にとって、少なからずショックであったに違いない。しかし、葦平の手紙には、そんな屈託は感じられない。大きく、温かい人物像が、伝わってくる。

後に井上ひさしが直木賞を受賞した時、選考委員だった清張は、井上を激励する手紙の中で「思う通りに直進して下さい」と書いている。葦平から渡された真心は、次の作家へと託された。受け手の資質もまた、大変なものである。

(※1) 松本清張宛 火野葦平書簡(昭和28年1月24日付)当館所蔵。常設展資料。現在は企画展「北九州市と松本清張」にて展示中。
(※2) 火野葦平宛 松本清張書簡(昭和28年1月28日付)北九州市立文学館所蔵。企画展にて展示中。

(専門学芸員 柳原暁子)

「顔」「球形の荒野」——京都いもぼう③

「球形の荒野」は、「オール讀物」に昭和三十五年一月から三十六年十二月にかけて連載された。

謎の手紙に従い、京都へ来た野上久美子だったが、待合せ場所の南禅寺山門に、相手は現れなかった。その後、久美子は、吾寺で言葉を交わした外国人女性にホテルで再会し、食事に誘われるが、同席する勇気がなくなってしまう。

久美子は、その招待を断わった反動からか、和食を食べたくなかった。むろん、このホテルでは目的は達せられない。京都では、特殊な料理として「いもぼう」というのを聞いていた。久美子は支度をした。鍵をフロントに預けると、その料理を食べさせる家を訊くと、円山公園の中にあると教えられた。タクシーで五分とかからなかった。その料理屋は、公園の真ん中であつた。これも純日本風のこしらえである。幾つにも仕切られている小部屋に通つた。「いもぼう」というのは、棒鱈(ぼうだ)とえび芋の料理で、久美子は他人からは聞いていたが、食べるのははじめてだった。淡泊な味で、かえって空いている胃に美味しかった。女中もみんな京言葉だし、隣の部屋で話している男連中の訛がそれだった。こうし



円山公園から八坂神社に続く道

て特色のある料理を食べながら土地の言葉を聞いてみると、しみじみと旅に出たと思う。略 料理屋を出て、夜の公園を少し歩いた。外燈が昼のように点いているから、暗い感じはしない。公園から八坂神社の境内に道がついている。茶店の中も明るかった。
(文藝春秋『松本清張全集6』より)

「顔」と「球形の荒野」の二作品には約三年程度の間隔があるが、話の展開においては、登場人物が手紙に呼び出されて指定の場所に行ったものの、約束の時間に呼び出した人物は現れないという共通点がある。前回紹介したように、「いもぼう」を供する店は円山公園内に二軒あり、これを意識したうえで二つの作品に登場させたかどうかは不明であるが、実態に即した舞台設定は読者の興味を惹きつけてやまない。清張が少年時代に愛読し、「昭和史発掘」で言及した作家、芥川龍之介の作品「芋粥」では、同じく「いも」を材料とする食べ物描かれ、作中、重要な意味をもっていた。若い日の読書がもたらした影響に思いを馳せてみるのも、また一興であろう。

京都の味「いもぼう」は、清張作品に描かれることで、より多くの人の知るところとなっている。(終)

(加地尚子)

研究誌『松本清張研究』

第十五号発刊



特集

清張と故郷「北九州」

対談

海峡の先輩へ☆遙かな清張

青山真治 田中慎弥

清張・〈故郷〉の血脈

山田有策

影の風景・「表象詩人」の小倉

松本常彦

二人の女性俳人の肖像——松本清張「菊枕」「花衣」

久保田裕子

「黒地の絵」の小倉

加島 巧

清張作品に描かれた北部九州と「佐賀」への傾斜度

大津忠彦

振矩師・甚兵衛の知略と俠気——「西海道談綺」論

石川 巧

松本清張と魯迅——「骨壺の風景」と「朝花夕拾」とにおける幼少年期の回想

藤井省三

望郷と黙郷と原郷と——「ふるさと」をめぐる藤沢周平、山本周五郎、松本清張

高橋敏夫

特別寄稿

「事実」の意味を問う清張

田中 実

——「或る「小倉日記」伝」の深層批評——

エッセイ

「半生の記」に見る〈故郷と旅〉

小林慎也

清張と小野家の人々

小野昭治

夢と想いのふるさと小倉——創造の原点

松本零士

再録

木綿耕の絵 セピア色の詩風景

「富島松五郎伝」解説

松本清張

松本清張氏の印象記

沈西城記

関詩珮編

投稿

「日本の黒い霧」の再評価——中国における翻訳を通して

尹芷汐

記念館研究ノート

松本清張 翻訳論——その受容と世界文学へのまなざし

柳原暁子

記念館だより

編集後記

友の会 活動報告

● 清張サロン

清張サロンは毎回、清張作品や清張に関する話題をテーマに、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流を目的に年8回開催されています。昨年11月から2月にかけては、下記のとおり3回開催されました。第3回は、友の会と記念館の共催とし、会員のほか、一般市民にも参加を呼びかけて行われました。いずれも参加者の皆様により深く清張作品に触れて楽しんでいただくことができ、充実したサロンとなりました。

第3回 11月29日(金) 14:00~16:00 参加者69名

- 会場 記念館 企画展示室
- 特別講演会 テーマ 「松本清張・小倉・昭和25年」
- 講師 加島 巧氏(長崎外国語大学教授)

第4回 1月31日(金) 14:00~16:00 参加者44名

- 会場 記念館 地階ホール
- テーマ 特別企画展「北九州市と松本清張」
- 講師 柳原 暁子氏(記念館専門学芸員)

第5回 2月28日(金) 14:00~16:00 参加者37名

- 会場 記念館 地階ホール
- テーマ 「菊枕」を読み解く
- 講師 増田 連氏(杉田久女研究家・友の会会員)

● 生誕祭

12月13日(金) 参加者57名
記念館 企画展示室

松本清張さんの104回目の誕生日を友の会会員でお祝いする「生誕祭」が開催されました。会員からの要望を受けて特別講演(卓話)が行われ、30年間にわたり清張担当の編集者として関わられた藤井館長に、傍らで見てこられた清張さんの素顔の一端をご披露していただきました。

会員同士の交流もあり、ケーキとコーヒーをいただきながら始終明るく賑やかな雰囲気で行われました。



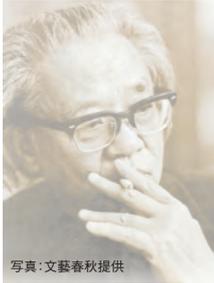
● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日~翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、『友の会だより』の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで
TEL. 093-582-2761

平成26年度
中学生・高校生

読書感想文 コンクール



写真・文藝春秋提供

清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「**軍師の境遇**」(『軍師の境遇』角川文庫、
『軍師の境遇』河出文庫)

「**顔**」(『張込み』新潮文庫、『声』光文社文庫)

「**眼の壁**」(『眼の壁』新潮文庫)

■応募方法

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■応募締切 平成26年10月31日(金) ※当日消印有効

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区内2番3号
松本清張記念館 感想文コンクール係
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、12月下旬頃、本人と学校に通知し表彰式を行います。
なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

- 最優秀賞(1人)
《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」
 - 優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 文具など(未定)
 - 佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)
図書カード その他
- ※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限定させていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」掲載を予定しています。

●協力 モンブランジャパン



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

平成25年度・ドラマ化された清張作品

今回、初のドラマ化となった「小説3億円事件」。原作は、松本清張が昭和の未解決事件である三億円事件の謎に、独自の視点で迫った短編小説です。事件の時効が成立した翌年の1976年。米国の保険会社から派遣された日本人調査員(田村正和)が事件の真相を究明していく過程で、登場人物それぞれの像が鮮やかに浮かび上がってくる、重厚な人間ドラマでした。



26年度も、清張原作ドラマの放送が予定されています。新聞テレビ欄等のチェックをお忘れなく。

〈放送日〉	〈原作名〉	〈主な出演者〉	〈制作局〉
25.4.24(水)	「留守宅の事件」	寺尾 聡	テレビ東京
25.10.3(木)	「顔」	松雪 泰子	フジテレビ
26.1.18(土)	「小説3億円事件」	田村 正和	テレビ朝日
26.1.19(日)	「黒い福音」	ビート たけし	テレビ朝日
26.3.9(日)	「球形の荒野」	木村 佳乃	BS日テレ
26.3.16(日)	「わるいやつら」	船越英一郎	BS日テレ

芦屋ロータリークラブで出前講演

平成25年12月24日(火)13

時から、「マリンテラス芦屋」において開催された芦屋ロータリークラブ(福岡県芦屋町)例会で、木村継男副館長が「松本清張記念館の魅力について」をテーマに卓話を行いました。平成25年4月26日(金)の小倉ロータリークラブに続く出前講演となり、当日は約40名が参加されました。

記念館の魅力や見どころなどを資料やスクリーンで紹介。参加者は興味深く耳を傾け、森プログラム委員長からも、「会員の記念館見学会を計画したい」と興味を示していただくことができました。

松本清張や記念館に関する出前講演を行っています。ご希望の方は、記念館までご連絡ください。

